

視覚障害者の英語学力と読速度 —現状分析を中心とした問題提起—

視覚部一般教育等 青木 和子

要旨：日本人英語学習者の持つ大きな問題の一つは「読みの遅さ」である。これは「読解力」の低さ、ひいては英語学力の低さにも強く結びつく問題として捉えられている。視覚障害者の場合、さらに点字や拡大文字を使用することによる特有の問題が加わる。しかしその実態は今まで明らかにされていない。本学学生の英語読速度と学力とを現状分析した結果、両者の関連はかなり高いことが明らかになった。

キーワード：視覚障害、点字、拡大文字、英語教育、読速度

1 問題提起

1・1 視覚障害者（全盲、弱視者）は「読み」に大きな問題をもっている。適当な読書材料が十分に提供されていないという環境の問題がある一方、その障害の本質に関わる問題として暗眼者に比べ極端に「読む速度が遅い」という点をあげざるをえない。そのため一般に視覚障害者の読書経験はかなり限られたものになっている。しかしここに興味深い調査結果がある。K. Fellenius (1996)によると、1988年から1991年にかけてスウェーデンの25人の視覚障害の学生の読書能力を調査したところ、visual acuity（視力）、reading media（点字、拡大文字などの読書材）、optical aids（オプチスコープやルーペなど）や読むときの目の近さなどが読書能力に及ぼす影響は明確にはみられず、good readers（すぐれた読み手）は、IQテストの言語能力で高得点を得たもの、そして読むことに強い興味をもっているものであった。これを教育的立場で捉えるなら、視覚障害による様々な困難を補償機器等によって、あるいはある種のトレーニングによって克服するための指導より基本的な言語能力、読書能力を伸ばす指導が重要であるということになる。

視覚障害者の「読み」に関する研究は数多くある。日本における代表的なものは、佐藤（1984）による視覚障害児の読書速度に関する研究、岡田（1979）による弱視児の「読み」に関する研究がある。欧米、特にアメリカでは過去90年間活発にbraille readingに関する研究が行われてきた（M. Knowlton, R. Wetzel, 1996）。また弱視児の読みに関する研究も盛んに行われている。それらの研究の中心にあるのは読速度の問題である。障害者の統合教育が進む中で、一般の学校で視覚障害者が学習する上で直面する最も大きな問題は課題となる読書量をいかにこなすかにある、という観点から「読速度」を上げることが重要なテーマとなったという背景が考えられる。しかしながら、これらの研究はすべて母国語についての

「読み」の研究であり、外国語としての英語の読みに関する研究はほとんどない。

1・2 外国語としての英語を学習する上で視覚障害はどのような影響を及ぼすであろうか。限られた教材、読みの遅さなどは母国語学習の際の問題と共通であるが、辞書の使用の制限による自主学習の困難さ、点字使用者は英語点字（1級、2級）の学習なども加わり、障害は二重、三重になっていく。このような状況ではよほど能力の高いものか、特に英語に強い興味をもつもの以外は英語学習を苦痛に感じているとしても不思議ではないであろう。一般に視覚障害者は音に敏感であり、その点で外国語学習、特に音声を中心とした語学学習に向いていると考えられている。しかし、音声にのみ依存する学習は学習者が自分のペースでの内省的な学習が充分できないために文法力、語彙力はもとより背景知識やテキストの構成の理解まで要求される「読解力」の養成には大きな問題をもつ。この「読解力」という基礎が築かれなままの語学学習は非常に不安定であり、ある程度以上の伸び、たとえばその言語による思考力、それに裏付けられたまとまりのある文章を書く能力への発展を望むことは難しい。いかに効果的な「読み」の学習を行うかが英語学習の重要なポイントとなる。

1・3 「読解力と読速度」

一般的な「読み」の定義は心理学、社会学、生理学などの見方も加わり、非常に複雑である。また、学習過程にある外国語を「読む」という活動は母国語の「読み」とは異なる様々な要素が加わる。谷口（1992）によると「英語を読む」という行為は二つに分けられる。一つは音読（reading aloud）であり、もう一つは読解（reading comprehension）である。音読は内容理解に大いに関係するが、これは聴衆である他人がいての活動である。一

方読解は読み手自身の内的な活動である。訳読中心の英語教育に対する批判の一つとして余りに正確な読みとりを要求するため極端に読速度が遅くなり、これがテキスト全体の読解を妨げる結果になるという指摘がある。このような背景から日本における「英語の読み」の研究においても読速度をその評価の指標とするものが多くなっている。しかしながら、日本人学習者の英語読速度を習熟度別に概括できるほどのデータはまだない。谷口(1992)によると1分間に150語程度が日本の高校2, 3年生の目標になるであろうと述べている。現実的には大学レベルにおいても100語に満たない学生が多いと言われている。平均的なアメリカ人の読速度についても諸説があるが、Fry(1982)は普通の大人では易しい読み物であれば250~500語と言っている。

1・4 英語を母国語とする視覚障害者の読速度

Lorimer (1990)によると、点字使用者は非常に優れた読み手であっても黙読(silent reading)の速度においては晴眼者の速度に達することは極めて困難であり、平均的な読みの速度は1分間に100語程度である。また、Mangold(1982)による視覚障害者受け入れるにあたっての教師むけの総合ガイドブックでは、一般高校生の読速度は平均1分間170-200語であるのに対し拡大文字のテキストや拡大鏡を利用する強度の弱視学生や点字使用学生の読速度はおそらく半分以下であろうと述べている。このギャップを少しでも埋めるために本書では録音教科書等の使用を勧めている。実際にアメリカではRFB&D(Recording for the Blind and Dyslexic)という非営利団体がこのような学生の要望に応じて録音教科書を幅広く提供している。また、Kerzweil(盲人読書機)の活用や合成音声装置を備えたコンピューターの利用も盛んに行われている。一方このことが学生の活字離れ、特に点字離れを生んでいるひとつの要因となっているとの指摘もある。Ryles(1996)は先天性の盲(強度弱視も含む法的にblindと認められている)の成人を対象に、主たる読書材として点字を使用している者、プリントを利用している者について調査し、前者のほうが教育レベル及び雇用率ともに高く、経済的にも自立し、読書に費やす時間が長いと述べている。これは基本的な「読む」能力が視覚障害者の社会的自立に大きな影響を及ぼすということを示していて興味深い。

1・5 研究課題

視覚障害者の「読み」という観点と英語教育における「読みの指導」というふたつの観点から以下の2点を研究課題と設定した。

- 1 視覚障害はどの程度英語読速度に影響を及ぼすか、また、英語学力と読速度には相関があるか。
- 2 視覚障害者が英語読速度をあげる効果的な方法はなにか。

2 現状分析

2・1 本学学生の視覚障害の状態と読書材

本学に入学してくる学生は全員が矯正視力0.3以下であるがその視覚障害の状態は様々であり、また教育的背景も大きく異なっている。読書材についても多様な要求があり、現在筆者が英語読解の授業で用意している教材は墨字が4種類、点字が2種類と計6種類である。墨字使用者にはさらにテキストをルーペやオプチスコープなどの文字拡大装置を使用する者もいる。墨字使用者と点字使用者の割合は年度によって大きく異なるが、平均的には約前者3に対し後者1となっている。

2・2 英語学力と読速度

本学学生の教育的背景は4年生の大学を卒業している者、留学経験のある者、一般高校卒業生、盲学校卒業生など多様であり、当然のことながら英語学力の点ではレベルの差が著しい。しかし、非常に高いレベルの学生はほんの一握りであり大半は英語学習に多くの困難を抱えているというのが実状である。特に目立つことはやはり「読み」の遅さである。今回は研究課題の1に沿って英語読速度と学力の関係を本学学生の1年入学時の調査をまとめることによって検討する。

2・3 調査方法と結果

2・3・1 英語学力

英語Ⅰの受講者(1年生)全員に対し4月当初に実力試験を実施した。試験は英検平成6年度第1回の準2級問題を使用した。(リスニング問題中の絵を使用する部分はカット、また回答時間は英検の視覚障害者特別枠に準じ、通常の1.5倍とした。)テスト結果は総得点110点(筆記80点、リスニング30点)を以下の要領で上位、中位、下位の3グループに分類した。

- A 上位グループ 80 ~ 110
- B 中位グループ 40 ~ 79
- C 下位グループ 39以下

上記の分類に従い、平成7年度、8年度の学生の英語学力をまとめたものが以下の表1である。

表1 実力テスト結果

	平成7年度n=32(8)	平成8年度n=39(7)	合計n=71(15)
A上位グループ	5	2	7
B中位グループ	15(3)	18(5)	33(8)
C下位グループ	12(5)	19(2)	31(7)

()内の数字は点字使用者

準2級のはほぼ合格ラインに相当するAの上位グループは両年度あわせて7名で全体の1割であり、この中に点字使用者は含まれていない。また、Bの中位グループの中でも110点満点中、半分の55点以下の者は平成7年度は15名中10名、平成8年度は18名中13名であり、Cの下位グループを合わせると両年度合計では55名となり全体の7割強となっている。いかに多くの学生が英語学習に苦勞しているかをうかがわせる。

次に筆記テストとリスニングテストそれぞれの平均をみると以下の通りである。(表2)

表2 筆記テスト、リスニングテスト平均

	筆記テスト平均(80)	リスニング平均(30)	全平均(110)
平成7年度(n=32)	32.2	15.3	47.4
平成8年度(n=39)	28.2	14.4	42.6

ここからは筆記テストに対し、リスニングテストの平均がかなり高いことがわかる。その要因の一つとしてはリスニングテストはテープに沿って実施されるため、各自の読みの速度に余り左右されることなく、全員が一応問題に取り組むことができたのに対し、筆記テストでは時間不足で後半の長文問題にはほとんど手がつかない学生が少なからずおり、「読み」の能力が大きな問題となっていたと思われる。

1回のみでのテストでの実力判定は事実上難しいが、その後の授業における観察やテストを通してみると多くの学生が「読み」のスピードが遅く、それがこのような成績の低さの原因の一つとなっていることは明らかである。

2・3・2 英語読速度

読速度の測定は以下の要領で行った。

*使用テキスト：Beatrice S. Mikulecky & Linda Jeffries
READING POWER (1986)
Addison-Wesley Publishing Company

*測定法：上記テキスト中の読速度測定用のpassage(100語の平易な英文からなる文章を3本)を使用し、実力テスト後の最初の授業において実施した。各自の読了時間をストップウォッチで計りwpm(word per minute)を測定し、3回分の平均を各自の読速度とした。各回ごとに4題ずつの内容チェック問題を行い、理解度をはかった。(問題数が少ないこともあり、50%以上の正解を目安とした。)この結果を実力テストの上位、中位、下位グループごとに分類したものが表3である。

表3 英語読速度

	平成7年度 読速度平均(wpm)	平成8年度 読速度平均(wpm)	両年度 読速度平均(wpm)
上位グループ	83.4 (5)	113.5 (2)	98.5 (7)
中位グループ	65.7 (15)	77.1 (18)	71.4 (33)
下位グループ	42.8 (12)	58.5 (19)	50.6 (31)
全平均	59.9 (32)	69.9 (39)	65.4 (71)

()内の数字は人数

読速度平均の差は両年度ともほぼ同じような数値を示している。両年度の平均の差をグループごとにみると、上位、中位グループの差は約27wpm、中位、下位グループの差は約21wpm、上位と下位グループの差は実に48wpmとなっている。この結果はグループ人数のアンバランス(特に、上位グループが7名と他のグループに比べ少ない)があり、他の様々な要因についての検討も必要であるが、一応、英語学力と読速度の相関はかなり高いということを示していると言えよう。読速度についてさらに点字、墨字使用者別に分類すると表4のような結果になった。

表4 点字、墨字別読速度

	平成7年度	平成8年度
点字使用者	43.0 (8)	86.1 (7)
墨字使用者	63.4 (24)	64.1 (32)

()内は人数

墨字使用者については両年度に大きな差はみられなかったが、点字使用者の読速度は平成8年度の平均が7年度の平均の2倍となっている。これは個人差の大きいことを示していると言えよう。学力との関連をみると、平成7年度の8名中、読速度が60を越えている2名と43の3名が中位グループに属し、他の4名は読速度は30台、点字学習歴が浅い1名は20台で学力は下位グループに属している。平成8年度の7名は比較的点字習熟度が高く1

名を除いて読速度は60～135wpmを示し、彼らのうち5名が中位グループに属している。ここからも学力と読速度の関連を読みとることができる。

2・4 考察

読速度全体平均の65.4wpmという数字は何を意味するであろうか。視覚障害者特有の問題として考えられるのは、弱視者においては読書材に極端に目を近づけて読むか、ルーペやオプテスコプ（拡大読書器）を利用する場合がほとんどで両者に共通することは視野が狭いという点である。特に英語の場合は長い単語は一度に視野に入らないということがしばしば起こる。読速度を高めるための訓練法はいくつかあるが、そのなかに視認語(sight word)を増やす(谷口, 1992)という項目がある。これは1回の固視でなるべく多くの情報を得ることをねらいとしている。視覚障害者の場合は明らかに視認語が少ない。また、読みの効率を高めるためには戻り読みをしないということが原則であるが、どうしても必要な情報をもう一度探すという作業は視野の狭い弱視者には大変難しい課題である。同様なことは点字読み(触読)においても言える。視認語に相当する一度の指の動きで読みとれる語は限られ、また必要な個所に戻るという作業にも時間がかかる。しかし、英語点字には1級と略字や略語を使う2級があり、2級を完全にマスターしている学生の読速度は墨字使用者のかなり速いものに匹敵する。(今回の調査では点字の最速と墨字の最速はともに135wpmであった。)しかし、本学の学生をみると2級点字の習熟度にはかなりの差がありそれが読速度のばらつき大きな原因になっていると思われる。

次に学力と読速度との相関をみてみると両者の関係がかなり明確に示された。特に学力上位グループの読速度平均98.5は下位グループの50.6の約2倍となっている点は注目に値する。上位グループの中に今回は点字使用者が含まれていないが、かなり重度の弱視者(通常の授業では拡大文字テキストとして4種類、12, 14, 18, 24ポイントを用意しているが、その内の最大の文字サイズである24ポイントを使用)が7名中3名含まれている。(それぞれの読速度は、108, 115, 92) 彼らはその視力障害にもかかわらず効率的な読み方を学習していると考えられる。さらに読速度90wpm以上の学生をみると、11名中上位グループに属するものが4名、他の7名は全員中位グループに属している。前に述べた一般学生の目標を150wpm前後とするなら、視覚障害者の場合は90～100wpmが実力アップのための一つのターゲットとして考えられるのではないか。また、下位グループ中最も遅いグループ(40wpm以下)13名を詳しくみると、5名

は点字使用者、ルーペ、オプテスコプ利用、及びテキストに18ポイント以上の拡大文字を使用している者は6名となっており、ここではその視覚障害がかなり大きな「読み」の障害になっているという事が示唆される。このレベルの学生は1語1語の認識に時間をとられセンテンスレベルやパラグラフレベルの読解にはまだ力が及ばないのである。このようにみえてくると、平均の数字はあまり重要ではないことがわかる。うまくいっている場合、うまくいっていない場合それぞれのケースについてさらに詳しく検討する必要がある。

3 今後の課題

今回の調査のまとめは「英語読速度と視覚障害」研究のための基礎データを得ることを目的とした。個人差は大きいが見覚障害者においても読速度と英語学力との相関はかなり高いということがデータから導き出された。今後は読速度、学力が共に高いグループと低いグループをさらに比較することによって両者の「読み」にどのような違いがあるのか、効果的な「読み」の学習とは何か等について検討をすすめたい。

(参考文献)

Fellenuis, K. Reading Competence of Visually Impaired Pupils in Sweden Journal of Visual Impairment & Blindness, May-June 1996 pp.237-245

Goda Fukuko The Development of Rapid Reading Skills in English Teaching, Journal of Fukuoka Jogakuin Junior College, No.12, 31-46 (1976)

Lorimer, J Improving braille reading skills; the case for extending the teaching of braille to upper primary and lower senior classes British Journal of Visual Impairment Autumn 1990 (VIII: 3)

Mangold, S A Teacher's Guide to the Special Educational Needs of Blind and Visually Handicapped Children American Foundation for the Blind (1982)

永井智 「速読指導の理論と実践」 『英語教育研究』 広島大学英語研究会 No. 23, pp66-72 (1980)

岡田 明 「弱視児の読みに関する研究」(1979) 学芸図書

Ryles, R The Impact of Braille Reading Skills on

Emplyoment, Income, Education, and Reading Habits'
Journal of Visual Impairment & Blindness, May-June
1996

佐藤泰正 「視覚障害児の読書速度に関する発達的研究」
(1984) 学芸図書

谷口賢一郎「英語のニューリーディング」(1992) 大修館

山田純 垣田直巳監修 英語教育学モノグラフ・シリーズ「英語のリーディング」 第3章Ⅱ (1984) 大修館